

展示つくるべし

関東自然史博物館めぐり番外編

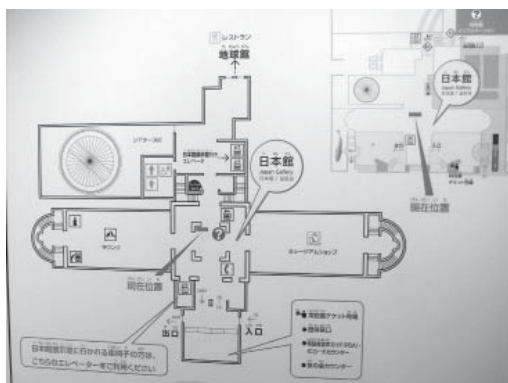
通信 27+28 号、通信 29+30 号で自然史博物館の展示の中で用いられている封入標本について紹介してきました。今回は、その番外編として、2007 年 4 月にリニューアルオープンした国立科学博物館（科博）日本館の展示を紹介します。日本館というのは、長らく工事をしてきた「旧館」のことで、リニューアルが新館が先になったため、新旧の順番が分かりにくくなり、名称変更になったそう（ちなみに新館は地球館に）。今回の展示では、封入標本はあまり使われておらず、少々あてがはずれましたが、他の展示も合わせて紹介しましょう。

■日本館（旧館）の展示構成

日本館の展示タイトルは「日本列島の自然と私たち」。名称通りに、地球館に対する位置づけは、エリアを日本列島に絞って自然を紹介するということのようなのだ。言わば地域博物館でいうところの「私たちの〇〇」（私達の群馬とか）に相当するといつて良いかもしれない。国立だから日本がローカルなわけである。ただ、後でもふれるが、地球館と共通する展示は多いし、来館者にとってそれほど分かり易い区分けとは思えない。

建物は歴史ある建造物で 3 階建て、各階は南翼と北翼に分かれるので、大きくもつのエリアがあることになり、その一つは特別展用となっている。新館と違ってエスカレーターがないため、最初にエレベーターで 3 階に上がってから、下りながら見るようになっている。展示構成は以下の通りである。

1. 日本列島の素顔
2. 日本列島の住い立ち
3. 生き物たちの日本列島
4. 日本人と自然
5. 自然をみる技



並べて見ると、1～3 の区別がよく分からないが、1 は自然の全体的な紹介、2 は古生物学・化石の話、3 は現生生物の話である。4 は人類史、5 は科学史で、学問的な区分がベースとなっている。

■日本列島の素顔

3 階の最初の展示は 生物の多様性を見せるコーナー。のっけから、地球館 1 階とかなりかぶっている感じはする。例えばオオセンチコガネの地理変異型のたくさんの標本を並べ、さまざまな形態がありますよ、というもの。そして、亜熱帯から亜寒帯まで、列島を縦断しながら、代表的な自然を紹介していく。



← 展示のスタートはこちらから。いろいろな形態の動植物がボックスに収められて、お洒落に並べられている。全般に照明が暗くて、やや見づらいのは残念。



← 各ゾーンの代表的な生き物が紹介されている。植物は... 封入ではなく、普通の押し花標本！ これはかなり淡めのつくりです... 鳥もしまわられていた剥製をそのままくりつけたような感じ。これはちょっと(笑)。ある意味形態の観察はしやすいですが。



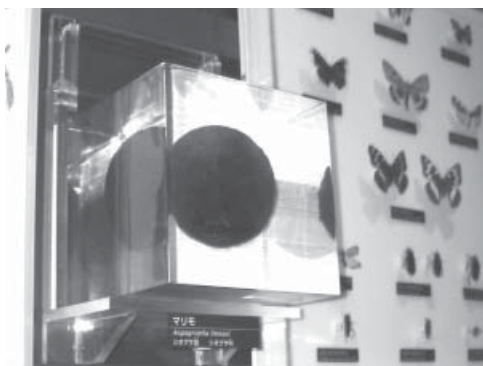
哺乳類などはジオラマ風で見やすい



植物標本は由緒正しそうですが、見た目だけでは？



← 封入標本がようやく登場ですが、「コケ・地衣・キノコ」コーナー。淡いなあ...対象が対象なので、再現性が高いかどうかは今ひとつ分からない。



← われらが亜寒帯のマリモも封入。これだけ突出してマス。



↑ 北海道のゾーンはこんな感じ。各ゾーンとも地質のサンプルまであるが、そんなにゾーンによる違いがあるのかな。昆虫などは標本がいっぱいありすぎて、どういう特徴なのか等は良く分からず。亜寒帯では右のエゾオオマルハナバチなどがいた。



海の生物もゾーン別に紹介。これも地球館1階とかなり似ている。

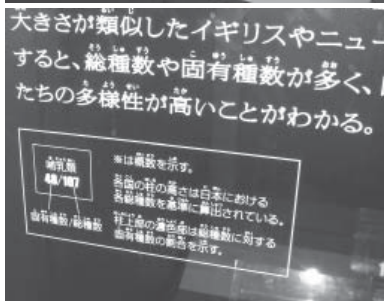
← 海藻類は、薄いパネルにはさんだ形で固定し、バックライトを当てていて、なかなかきれい。地球館の封入より良くなった。薄い標本なら、このはさむやり方があるらしい。



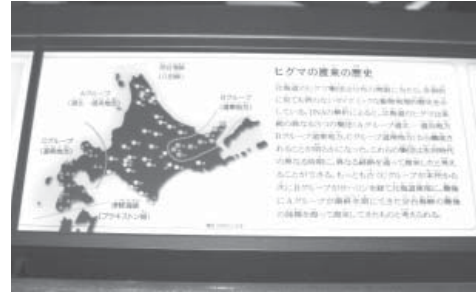
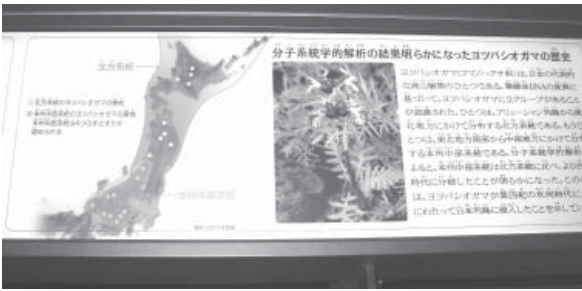
← 地質の展示もデジャヴ感がいっぱい。というか、左のは札幌市博物館活動センターのと同じですな。



← 2階の種分化の話のスタートがこちら。動植物の種数や固有種数を、同じ島国のイギリス・ニュージーランドと比較するというもの。題材はいいが、展示方法が分かりづれえ。床に立っているアクリルの棒の高さが種数で、色が薄くついている部分が固有種数というのだが。とにかく床に棒がいっぱいあり、どれがどれだか分かりにくい。配置は縦に国が並び、横に植物・哺乳類・魚・・・という分類群が並ぶのだが、透明なものもあって、比較もしづらい。



ひとめ見て、日本の豊かさが伝わらないといけないので、これではダメダメである。アクリルにはレーザーでその分類群の生き物の立体像が入れ込んであったり、というところは凝っているのだが。



地理分布と系統分堰の話は、いろいろな種で詳しく紹介されている（上はヨツバシヨガマとヒゲマ）
 展示の日本地図の上に剥製をおいているのが今ひとつ内容と合わせられていないのが残念。



← 植物の地理分布と種分化の話の説明に使われているのは、写真とさく葉標本。ここでも標本大活躍だが、写真以上の情報は無い気がする。科博ならではの貴重な標本だと言うのなら、蒴蓄も欲しいところ。

上はキリギシソウ・ヒダカソウなので、おっと思ったが、標本はカラーコピーだった。あれれっ。



← こちらはウスユキソウの仲間。ちゃんとした標本もついていた。

いずれも調査対象として、我々がよく接した植物達だが、見る視点が随分違うので、展示を見ていても不思議な感じがする。



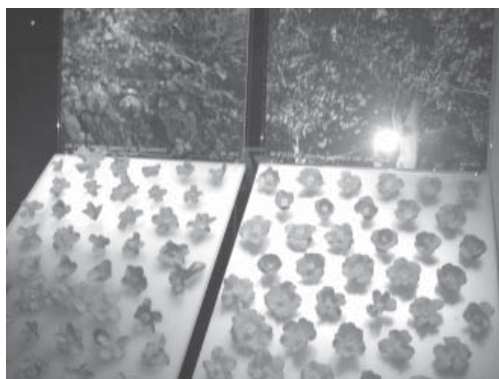
鳥だと剥製がくくりつけられている。形態比較にはいいのではないかと。

北海道と本州のフキを比較する展
 示。北に行くほど植物も大きくなる、
 ということでアキタブキが紹介され
 ているが...これはやりすぎじゃな
 いんですかい！ 巨大なウワンフキ
 の展示は確かに面白いが、すごく誤
 解を与えそう。



← ややありがちな夏毛と冬毛の比較展示。
 床も季節に合わせて色を変えたりして欲し
 かった...

これも本州ではおなじみのユキ
 ツバキ (多雪型) とやぶツバキ (太
 平洋型) の比較。花の形に注目して、
 いっぱい並べているのだが、正直違
 いがよく分からず...



↑ 移入種のコーナーも植物はさく葉標本が展
 示されていた。封入はクモ類のみ。貴重な
 標本と言うわけでなし、ここは本当なら封
 入の出番かもしれない。

軽くまとめ



手でさわれる歯の展示。インタラクティブ。

今回の展示では、封入標本は極めて限定的で、藻類などとクモ類くらいしか使っていなかった。数も少ない。聞いた話では、やはりこれらの博物館の封入標本を製作している会社は一社のみで、その得意不得意も出ているようだ。今までも植物はできなくなかったので、普通の標本でということになってしまったのかもしれない（模型はすごく高いそう）。

一般に展示品は科博コレクションの紹介という色彩が強く、骨重品のなものを見せるという演出？が強いように感じられた。建物が古いせいもあるかも。しかし、内容を理解するための展示という位置づけが薄いのは不親切と言わざるを得ない。

ミュージアムグッズについて

渡辺 修

フィギュア製作の海洋堂が今後力を入れるという博物館展示をお土産にしたグッズが日本館オープンとともに目見えしていた。すでにケース売りのフィギュアがミュージアムショップで売られていたのだが（各 900 円）、ガチャガチャタイプのブラインドフィギュア（カプセルに入っていて開けるまで何が入っているかわからないもの、当然重複してしまう）が 9 種類販売されていた（1 回 300 円）。海洋堂はブラインドにこだわっているようなので、こういう新企画になったのだろうが、果たして成功するかどうか。値段が安くなったのは大きなプラスだが、見ていた感じでは大人気という気配はなかった（汗）。

中身は日本館の展示品で、お土産・記念の価値は高い。個人的には記念らしい日本館の建物のフィギュア（写真）を気に入った。飛行機の形のデザインということがよく分かるし、屋外展示のシロナガスクジラ模型もついていてウレシシ。他のラインナップも科博の象徴とも言えるつたバスズキリュウなど、なかなか良いのだが、ヤンバルテナゴコガネやトキは小学館天然記念物シリーズのフィギュアと同じではないのかしらん。動物の新作がないのは、かなり残念。

